

別子往還道を訪ねて

第四回 東平①

「東洋のマチュピチュ」

最初にその名前を聞いてから早いもので、10年余りの年月が経過しました。

2年前、その名前が突然脚光を浴びることとなり、関わった人々のご努力によって、その名前を冠した近代化遺産を目指して、市外・県外も含め、毎日たくさんの人たちが訪れてくれることを、大変うれしく思います。

「東洋のマチュピチュ」東平は、大正5年（1916）から昭和5年（1930）までの15年間、別子銅山の採鉱本部が置かれたところですが、283年間の歴史を誇る別子銅山にとつて、採鉱本部が置かれたのはわずかな期間ですが、その間に、別子の鉱石から年間1万トンを超える銅が生産されており、ひとつのピークを迎えています。

東平の開発は、明治27年の第三通洞開さく（明治35年開通）に始まります。東平に集められた銅鉱石は、東平〜黒石（端出場の北地点）間の複式索道に載せられた後、下部鉄道により港まで運ばれ、その後、四阪島での製錬が行われました。明治39年には、尋常高等小学校が東平で開校、明治44年には、日浦通

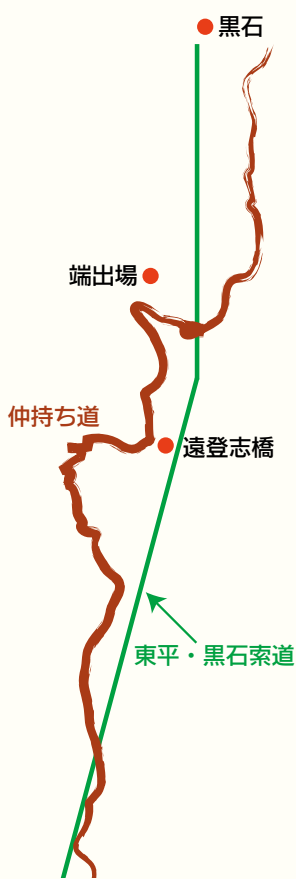
洞が開通し、一般の人も含めて銅山越をするこ
となく、旧別子側の日浦と東平を電車で往来す
ることが可能になりました。

東平の魅力は、鉱山遺跡と共に四季折々の自
然の美しさです。唱歌「荒城の月」の作詞家と
して有名な土井晩翠は、今は無くなった東平接
待館で、『東平の山ふところに石楠の花な
がめつつ鶯を聞く』（昭和11年）と詠みました。
住友の理事でもあった歌人 川田順は、『あかね
さす 赤石山と ぬばたまの 黒森山の 間に
今日居る』（昭和30年）と詠みました。

二人が感じたのと同じ、大自然のパノラマに
抱かれながら、圧倒的な鉱山遺跡を楽しんでく
ださい。



東平全景



市政だよりにはま（通巻七八二号）平成二十三年八月一日発行 毎月一回一日発行

広告欄

広告欄